

年度予算以降赤字はさらに急激に増大したが、同政権はこれに対しその景気循環的要因に注目し、1992年度から社会保障項目に「景気循環的社会保障」(Cyclical social security)を別置し、これを計画総額(Planning total)ないし新管理総額(New control total)の枠外に置いた。これは、不況期の赤字を好況期の黒字で相殺し、1循環を通して財政収支バランスを達成できればよいという財政均衡に対する新たなスタンスに照応していた。第4に、確かに、イギリス財政のPSDRからPSBRへの再転化の最大の要因は1990年後半には明瞭となった景気の後退不況の深まりであった。第5に、だが、こうしたPSBRの急増は、粗固定資本形成等の資本的支出に対応するPSBRにとどまらず、経常支出もPSBRによって賄われるという「黄金則の侵犯」が指摘されるほどであった。

1980年代のイギリス産業の資本蓄積と産業政策

森 恒 夫

本年度は、現代のイギリス産業の資本蓄積の重要な枠組の1つをなすイギリス財政について、サッチャー政権末期～現メージャー政権に焦点を当ててサーベイを行なった。これは、既発表の「サッチャー政権下のイギリス財政」(証券経済研究所『証券研究』Vol. 91, 1990所収)の続編ともいうべきものである。

同稿でも述べ、また周知のことであるが、イギリス財政は、レーガノミクスと対照的に抑制的政策態度を堅持したサッチャリズムのもとで、前労働政権下に急膨張した赤字(Public Sector Borrowing Requirement, PSBR)規模を急速に縮小させ、1987年度から、公企業の民営化収入に助けられてはいたが、黒字(Public Sector Debt Repayment, PSDR)に転化していた。サッチャー政権末期～メージャー政権下のイギリス財政の動向でもっとも目立った点は、それが間もなくPSDRからPSBRに再転化し赤字を急膨張させたことである。その経過について知りえた点を若干述べておこう。

第1に、サッチャーは1990年11月にメージャーに政権を委譲し、メージャー政権はサッチャリズムを基本的に継承したと考えられるが、なおそこに、景気や雇用に対するより強い配慮が窺われた。第2に、しかし、サッチャー政権最後の予算年度であった1990年度には一般政府財政収支はすでに大幅赤字に再転化しており、公社の黒字や民営化収入によって辛うじて黒字になっていた。第3に、メージャー政権となった1991